

## 189. パジリク王墓 日ソ合同発掘調査参加記 (前編)

### はじめに

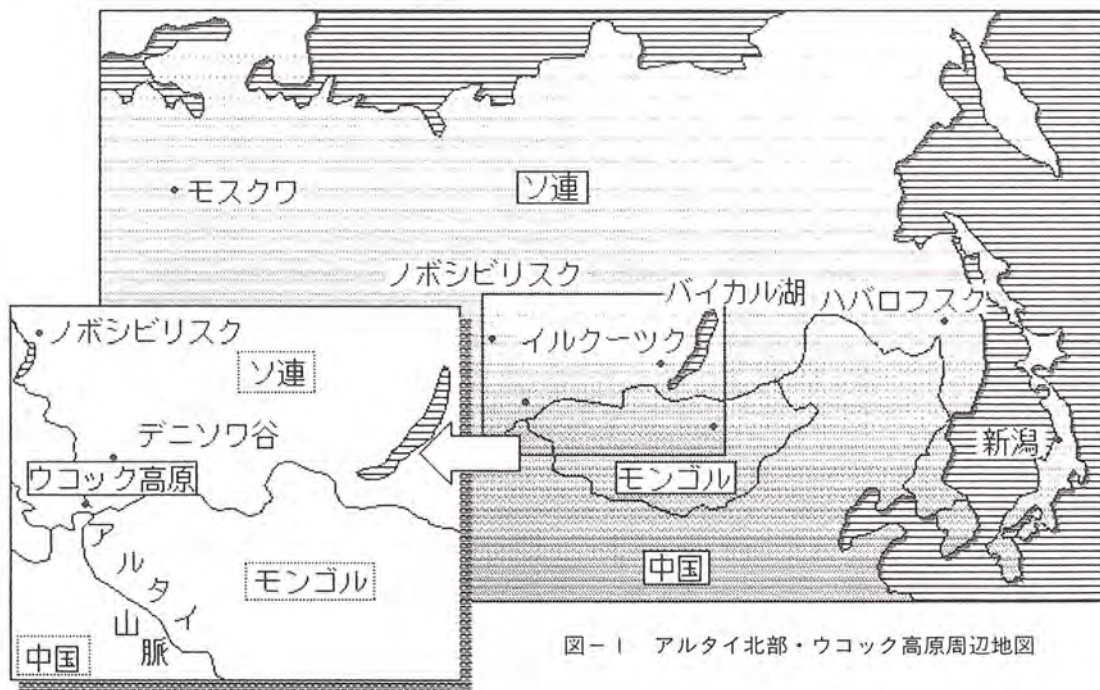
この学術調査は、アルタイ地方のスキタイ系騎馬民族の歴史と文化をソ連と各国が共同で研究していくことの手始めとして計画され、昨年の事前調査に続き本年の6月から8月にかけて本調査が実施された。

今回、保存科学分野からこの学術調査に参加し、ソ連をはじめ諸外国の研究者と交流し調査研究の現状を知ることができた。前編では現地までの経路、古墳の発掘調査、そしてキャンプ地でのテント生活を中心にその概要を報告する。また、後編ではアルタイの山々に散在する岩壁画や旧石器時代の遺跡、そのほか現地での生活ぶりなどを日程を追って紹介する。

### 1. 合同学術調査について

古代スキタイ系騎馬民族の古墳群の発掘調査主体は、ソ連科学アカデミーシベリア支部・歴史言語哲学研究所(A・P・デレビャンコ所長)で、ノボシビリスク大学などソ連各地の大学、博物館などから多くの研究者がこの調査に参加している。また、外国からは、日本、米国、英国、韓国などの共産圏外の専門家も多数参加しており、従来にはない国際的な交流をめざしたプロジェクトである。

このプロジェクトのタイトルともなっているパジリク王墓は、ソ連、中国、モンゴルの国境付近に散在する古代騎馬民族の代表的な墓といわれる。アルタイ山脈の北部に位置し、1920年以降ロシア博物館のS・I・ルデンコによって実施された発掘がとくに有名で、保存の良好な人体、フェルト、絨毯、馬具などの出土がある。本年の発掘調査地域は、ソ連、中国、モンゴルの3国の国境に近いウコック高原に点在する古墳群が合同調査のフィールドとして選ばれた。



図一 アルタイ北部・ウコック高原周辺地図



ノボシビルスクからヘリに乗る



ヘリから見た氷河



ウコック高原・キャンプ地



クルガンの発掘調査（第1キャンプ）

日本側の協力はおもに保存科学分野で、アカデミーから招聘を受けて関西地方の各機関から保存科学の専門家が3名ずつ4班に分かれて約3週間交代で参加した。また、この期間に現地を訪れた考古学関係者も10数名にのぼった。

## 2. 日本からノボシビルスクへ

日本からソ連に入るには、新潟からハバロフスクへの空路が週2便出ている。ソ連への旅はここ2、3年のうちに大変便利になった。このハバロフスクへは新潟から約1時間30分程度で到着する。中国との国境が近く東洋人も多く、将来日本の企業の誘致、また観光開発を積極的に進めていこうという極東の街である。

このハバロフスクで一泊したのち、国内線で約6時間かかって（途中イルクーツクで給油）ソ連のほぼ中央の都市ノボシビルスクへ向かった。途中のシベリア大陸の地形は夏ということで雪原はなかったものの、果てしなく続く森林のなかを自然にまかせて蛇行する無数の河川が印象的で、シベリアの森林資源の豊富さを実感した。

ノボシビルスクはソ連のほぼ中央にある人口約130万人の都市である。近くにオビ川を堰止めて造った広大な湖がある。ノボシビルスクの空港からバスで1時間余り郊外に、ソ連が誇る『アカデムゴロドク』という学園都市がある。ちょうど日本の筑波学園都市のよ

うな町だ。

この学園都市にソ連科学アカデミーシベリア支部があり、言語学研究所、哲学研究所、歴史学研究所、考古学・民俗学研究所の4つの研究機関を持っている。

今回はこの4番目の考古学・民俗学研究所の招きで調査に参加した。これらの研究所は、シベリアの文化と歴史をさぐることで、その業績は世界的に高い評価を受けている。

## 3. ウコック高原

ノボシビルスクの学園都市にあるアカデミーのホテルで一泊し、次の日ヘリコプターで発掘調査地のウコック高原へ向かった。ウコック高原に行くまでアルタイ山脈の氷河を3つほど越えなくてはならない。ふつう氷河を上空から見るといことはなかなかできない。氷河によって削り取られて鋭くなった峰々が壮観だった。ジェットヘリは天候によっていつ不時着するかわからないという。ときどき強風に翻弄されながらなんとか高原についた。途中ゴルノアルタイスクなどで給油しての5時間30分の旅だった。

今回の調査地であるウコック高原は氷河に囲まれた盆地に広がる草原で、標高が2200mたらずであるが気候の変動がとくに激しい。日中は直射日光がきびしく、30度以上の暑さであるが、曇ったり夕方になって日が差さなくなると急に気温が下がる。夜間は真夏でも零

下になる、調査中や移動中に天候が変わるのに備えて  
雨具や防寒着は必携である。

ウコック高原には高くそびえる木は全くないが、高  
山植物の可憐な花が短い夏にいっせいに咲いていて美  
しい。高度のせいで空気が薄く、急に動くと息がきれる。  
また湿度が20%程度と非常に低く乾燥しているので、鼻  
の頭や唇が荒れやすい。空気が非常に澄んでいるので夜  
は晴れていると全天に星が輝き、天の川が端から端ま  
で見られる。

#### 4. 発掘調査と応急処置

このウコック高原での調査は2つのキャンプ地にわか  
れている。第1キャンプのあるところがベルテック  
と呼ばれる地区、第2キャンプがクツール・グンダスト  
と呼ばれる地区である。いずれもオビ川の最上流の  
川が近くを横切る立地である。

多くの学生が夏の間この調査に参加していて、総勢  
50名以上がテントで共同生活していた。我々は6畳ぐ  
らいのコンパネのわか仕立ての山小屋に2人が入り、  
軍需品と思われる寝袋が与えられた。

第1キャンプでは、ソ連の考古学者をヘッドに学生、  
保存処理担当者がグループになり、大小数ヶ所のやや  
小規模の墳墓の発掘調査を同時に進めていた。ベルテ  
ック1号墳からは人骨、馬の骨、馬具など、チュルク  
(トルコ系種族)の9世紀の古墳から銅鏡などの出土  
があった。

発掘の方法は、積み石の構造を見ながら石を上から  
外していき、主体部の掘り方の確認をする。クルガンの  
周囲の石は残し、適宜スケッチ風の図を担当者が描  
き、主体部を掘り進める。第1キャンプでの発掘をし  
た地域では地下水が少ないため凍結していなかった。

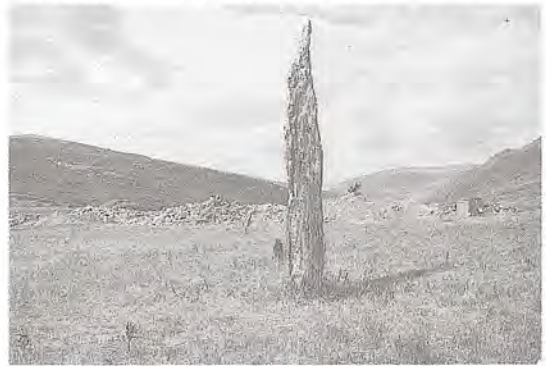
第2キャンプは、第1キャンプから10キロほど離れ  
た谷間にあり、歩いて行くと1時間半以上かかる。上  
り下りの激しい草原を歩いていくので相当疲れる。ト  
ラックでも道路事情が悪いので40分ほどかかる。一人  
で歩いての移動は禁止された。高原は気象の変化が激  
しくまた、起伏のある地形がどこもよく似ていて、迷  
子になる危険性があるからである。

我々がこの第2キャンプに移動したときには、紀元  
前5世紀ごろの直径28m級の中規模クルガンを中心に  
発掘調査が進められていた。外周に立てられた偏平な  
石を残して積み石が取り除かれ、主体部が掘り進めら  
れていた。

主体部の掘り方は、約6m四方で、地表から深さ約  
240cmのところまで木樑が現れた。木樑は馬を副葬する区  
画を入れて、縦が約470cm、横が約340cmであった。部  
材を取り上げる前に木樑内部の温度を測定したところ、  
約マイナス1度Cであった。主体部に降りるとひんやり  
とした冷気が漂っていた。



小規模のクルガンの発掘調査（第1キャンプ）



中規模のクルガン（第2キャンプ）



木樑の出土状況



木樑内部の発掘作業



木柵部材の間からでてきた氷塊



出土遺物の取り上げ作業



木棺の出土状況



木棺の応急的保存処理



出土した木製装飾品

発掘の作業に使用していたベルトコンベアーなどの機器類は、今回の合同調査に備えて日本側が提供したもので、掘り方いっぱい築かれた木柵を掘り出すためには多くの人がなかに入れないため、大きな石や土砂の搬出、部材の引き上げに少なからず役にたった。

このクルガンは全面的に凍結していなかったものの、木柵の部材を取り上げていく途中、木の間から大きな氷の塊がでてきたのには驚いた。なにしろ冬はマイナス40度以下になる地域で、地中深くは凍土である。

木柵は二重構造になっており、部材を取り外しながら発掘を進めていくうちに中央に大きな穴があり、内部に人の頭ぐらいの石が積みられていることがわかった。このことはこのクルガンが盗掘を受けていることを示していた。しかしながら、やや丁寧に仕上げている二重目の木柵の部材を外して行くと、内部からは青銅の釘が打たれた木棺が出土した。釘は20数センチのたいへん立派なものである。主な副葬品として、フェルト製品の断片、副葬された馬10頭、山羊を意匠した木製の装飾品などが出土した。

取り上げた木柵部材の応急的な処理として、遺物にまず現地で使用しているホルマリン系防腐剤を塗布し、不織布に包みポリシートで密封した。今後これらの木材などは、日本の持つ保存科学の技術を活かした恒久的な保存処理がなされる予定である。

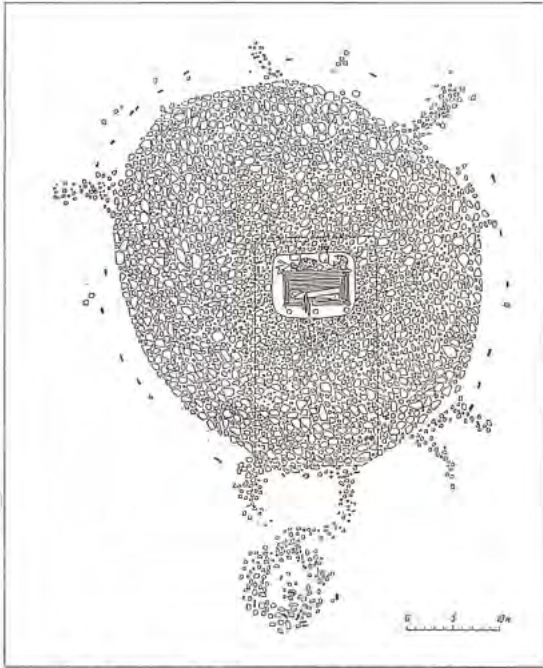


図-2 バジリク 5号墳 (1948年発掘調査)

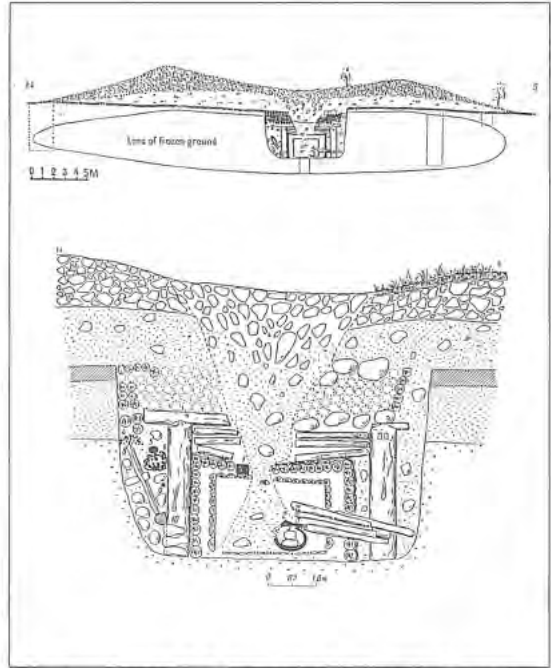


図-4 バジリク 6号墳断面模式図(1948年発掘調査)

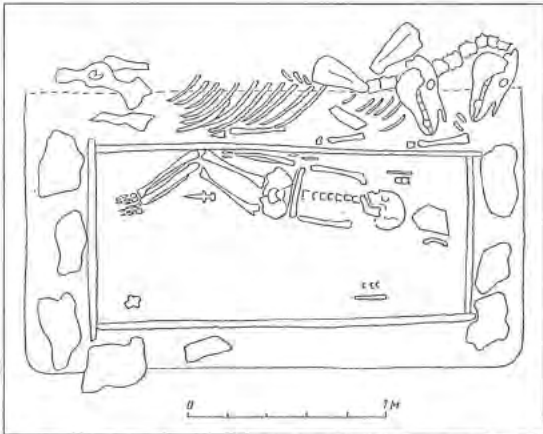
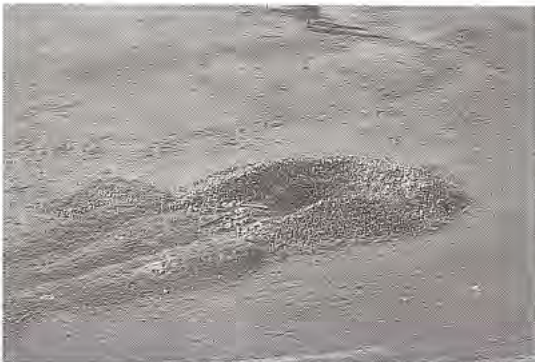


図-3 人骨および馬の骨 (バジリク 6号墳)



バジリク古墳群

### 5. 過去におけるクルガンの発掘調査について

冒頭に少しふれたが、バジリク王墓の名を世界に広めたのは、ロシア博物館のS・I・ルデンコであった。1924年から数回にわたり、バジリクの高墳群の発掘調査を行っており、1949年までにバジリク1号墳から8号墳までの古墳の発掘調査が続けられ多くの成果が得られている。

バジリク文化期という呼び名が生まれたこの地域を中心として、アルタイ北部のクルガンの構造はほぼ一定している。竪穴に丸太を加工し木樑を築いて、上に石を積み上げている。必ず馬を副葬しており、副葬品も馬に関するものが多い。馬を飾るフェルト製品、木製の装飾品など。この木製の装飾のモチーフにはグリフィンと呼ばれる怪鳥がよく現れる。頭はタカのように体の部分は馬や虎などの姿をした想像上の動物である。

当時発掘された資料のなかには、凍結した木樑の中から出土した入墨をした被葬者、衣服、フェルト、織物、革製品、絨毯、馬具などがある。

昨年直径18m級のクルガンの発掘調査では、木樑内部が凍結しており出土品も多様であった。鉄製の馬具、魚をモチーフにした多用なフェルト製品、怪獣が向い合わせになったデザインの木製装飾品など。現在整理中であるが、とくにフェルト製品の保存状態は良く、魚の形に切り抜かれたフェルトを染料で染め、縫いつけられている様子が観察できた。



昼食のメニュー



発掘現場を訪れた遊牧民



キャンプ地での食事



バーニャ

## 6. キャンプ地での生活

現地での仕事の時間は、午前中は9時から午後2時までで、昼休みは食事と休憩をいれてたっぷり2時間ある。この間に近くの川に釣りに出かけたり、泳いだり自由にできる。夕食は午後8時からである。日没が10時であるから夜は短く、ウオトカなどのアルコールを飲んで夜更しをするとやはり次の日にさしつかえる。また飲んでも気圧が低いので悪酔いする。

食事は食堂用のやや大きいテントにみんなが集まる。発掘調査現場での食事は、ロシア人のまかないのおねえさんや学生たちが交代で作ってくれた。3食のメニューはだいたい決まっていて、材料も山の中ということで非常に種類が限られている。ある日のメニューを紹介するが、キャンプ生活ということもあって次のようにいたって質素な内容であった。

<朝食>午前8時～9時

パンまたはオカユ（カーシャというミルクで炊いた米のおかゆ）、無塩バター、紅茶

<昼食>午後2時～4時

パン、シチューまたはスープ、野菜（キュウリなど）、肉料理（肉は羊肉、昼食は量が多く1日の食事のメインである）

<夕食>午後8時から9時 スープ、パンなど

夜は電灯がつくが、ソ連製の発電機で絶えず故障していて使えない日が多く、結局はロウソクと懐中電灯がたよりだった。夜明けは摂氏マイナス2度の寒さで、持ってきた衣類を全部着込んでもまだ寒い。毛糸のクツ下をはいて、さらに寝袋のなかに使いすてカイロを2、3個入れてもまだ寒かった。寒さに対処するためには、バーニャというサウナ風呂に入って充分温まって寝袋にはいるのがいい。

生活するうえでやはり水が一番問題であった。調理にはキャンプ地の近くを流れる白濁した雪解けの水が使用された。山肌を削った水はまさに泥水であったが、しばらくすると慣れてしまった。しかしコーヒーやお茶をいれるのにはこの水は鉱物質が多すぎる。香りが無いのでまずい。

食料はヘリの便があれば、ジャガイモ、ニンジン、キャベツ、トマト、キュウリなどの野菜が運ばれてくる。しばらくヘリが来ないと食事に出される野菜がへってくる。野菜が少ない日が続いたのち、着いたばかりの新鮮なキュウリに塩をつけて食べたときはおいしかった。

この前編ではウコック高原での発掘調査を中心に報告したが、後編ではアルタイ地方に散在する岩壁画や旧石器の遺跡をいくつか紹介する。（中川 正人）